

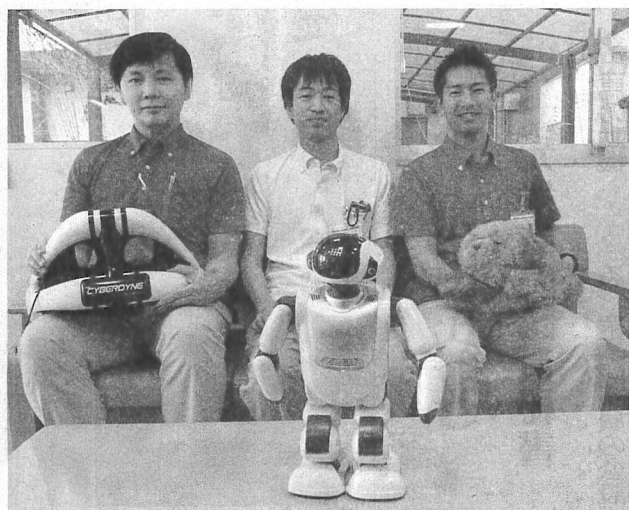
瑞穂
ユニット菜の花

介護ロボット導入

都のモデル施設に

瑞穂町殿ヶ谷の医療法人社団幹人会・介護老人保健施設「ユニット菜の花」(玉木一弘理事長)は、東京都のロボット介護機器・福祉用具活用支援モデル事業のモデル施設として、4月から介護現場に「ロボット」を導入。介護とロボットの関わりや効果を科学的に検証する。

政府は介護職員の身体的負担軽減や介護の質の向上、高齢者の自立支援などを目的に、ロボット介護機器・福祉用具の適切な使い方や効果的な導入法を検証・普及する取り組みを進めている。東京都は2017～18年度に



介護ロボットを手にするスタッフ

定期的なモニタリングで検証する。菜の花が導入したのは、アザラシの赤ちゃんの姿をし、ぬいぐるみのような肌触りでセラピー効果が期待されるコミュニケーション型ロボット「パロ」(写真右)と、会話や体操、ダンスもできる人型の「パルロ」(写真中央)2機、職員の腰に設置して負担を軽減する「ハル」(写真左)1機、利用者のベッドのマットレスに敷いて睡眠状態を評価する「眠りスキャン」1機、車いすに座った姿勢を3次元的にサポートする「マイチルトコンパクト」1台。同施設ではロボット(人工知能)との日常会話やレクリエーション、コミュニケーション

ンが認知症の人や利用者にとどのくらい癒し効果や生活の活性化をもたらすかを調べるほか、介護職員の腰痛予防や負担軽減、職員への癒し効果も期待している。

玉木理事長は「介護とロボットの関わりを科学的に検証して、介護の本質を見極めながら、ロボットとの関わりを探っていきたい」とし、「気づきや目線と目線での頼り合いなど、介護の本質的な部分

分は人間の仕事。本来アナログな世界である介護の現場の中で、最先端のIT技術を前向きに取り入れることで、将来の医療・介護分野でのロボット導入のモデルになれば」と話す。

同法人の介護支援専門員の大家恵利子さんによると、1日から導入されたパロやパルロなどコミュニケーションロボットの反応に、利用者のみならず職員らも大喜びだという。

西多摩新聞

発行所
株式会社 西多摩新聞社
福生市本町3番地
〒197-0022
電話 042・552・3737(代)
FAX 042・552・3778
毎週金曜日発行
年間購読料 9,864円
半年 4,932円